恩師寄稿

老境雑感

武石　堯

今書きはじめたこの文章「恩師寄稿」という欄に載るそうです。

ところが、恩師といわれるたびに、強いためらいと恥ずかしさを感じます。

恩を受けたのはこちらの方で、校長はじめ同僚の方方、生徒のみなさんのやさしさ、心の寛さのおかげで十六年もの長い間、楽しく勤めることができたのです。これはその前に務めた学校の二十年間も全く同じです。

見島北灯台（山口県最北端）

「恩師」と共に「教え子」という語にも違和感を覚えます。教員と生徒は学校で偶然出会ったあかの他人で、親でもなければ子でもありません。その他人どうしが人柄を認めあい、敬い、許しあって、それぞれが自ずと育っていくのが、理想なのだと思います。「教え」るといっても、自分に限っていえば、何程のことが伝えられたでしょうか。

こんな御託をならべるのも、己に全く自信がないからだ、とは分っています。

教員として過ごした三十六年の間に、まじになった所が少しはあるのなら、ありがたいと思っています。教えられ育てられたのは、わたくしの方なのです。

水戸二高に移って一年後の春休み、市内の画廊で個展をひらきました。生徒さんが大勢みえて、二階の床がしなりだし、画廊の主人は、床がぬけるのを心配した程でした。

そのとき、ある生徒が訊きました。センセはいつこんな絵を描くのだ、と。答え、早く帰って夜おそくまでだ。学校のことより、こっちの方がだいじか、と迫ります。ふてくされて、そのとおり、と答えます。

「教え子」と、水戸二高の教員としての心構えはどうあるべきか、そういうお説教をしてもくれました。

朝の眠気を覚まそうと、自転車をとばして十三キロ、学校に着くと快い疲労がやってきます。深酒をしたときは、ホームルームで小言をくいます。身なりについてのアドバイスなどなど、生徒はお姉さんのようでした。

展覧会といえば、東大寺南大門仁王像の解体修理がありまして、その募金に応じて、やはり春休み、猿沢池のほとりの画廊で催したことがありました。

二つの学校の同僚や卒業生が何人も来てくれたのですが、在学中の生徒さんが十人ほどやってきて、東大寺の寮に泊まりました。

遊びに来たお坊さんが彼女らにききました。東大寺の宗派は何だ。ある生徒、華厳宗です。華厳とはどういう意味だ。答え、雑華厳浄（ザッケゴンジョウ）です。傍で聞いていてうれしくなりました。武石の生徒はたいしたものだ、と褒めあげたから、彼女らは優等生ぶりを発揮します。寮の管理の小母さんも、なんて行儀いい子供らだ、と手ばなしで褒め囃します。内と外との使い分けは、彼女らの賢さによるものでしょう。

かくて三十六年は夢のごとく過ぎ、離任式の次の日に愛車を駆って旅にでました。灯台を写生して歩けば、日本列島の輪郭をたどることができると思ったのです。

約三百日かけてそれが終り、イギリスにわたりました。現存する日本最古の西洋式灯台は、東京湾の神子元島にあります。これを造ったのはイギリス人でしたので、そこでの灯台めぐりを始めたのです。

イギリス領 最北端の灯台（マックル フラッガー）

一ヶ月の旅行を二十回重ねアイルランド、そして今はフランスの海岸を回っています。その間の事情は茨城新聞社の好意で、紀行文の連載をつづけてます。今年は四百回めに入るでしょう。

それを読む友人が、おまえの文には必ず女がでてくるねえ、といいます。

一つだけ、その話をします。アイルランドの乗り換え駅でのこと、ホームにかかる橋をわたるときです。

荷が着いた自転車をそのまま運ぶのは非力な老人には無理でした。三回に分けてと鞄をはずしていたら、通りかかった女性が二人で自転車を持ち、さらに別のふたりが鞄を運び、彼女らの後に手ぶらの老人が続いたのでした。

こういったこともあるものですから、八十路の坂を登りゆく旅、簡単にやめるわけにもゆきません。可愛い子には旅をさせよ、といいますが、老人の場合でも然りだと思っています。

活躍する卒業生

"Forms of My Hearts Imagination"

小宅　淑子（昭36卒）

昨年の一月七日～十三日に県民文化センターで「彫刻五十周年記念展」を開催し、無事終える事ができました。この展覧会は歩んできた彫刻五十年の集大成として計画実施したものです。秀芳会の狩野会長様はじめ多くの会員の皆様にご来場いただき厚くお礼申し上げます。

先般、この原稿依頼があり久しぶりに机に向かい思案中に目に入った言葉が、「道・この道より我を生かす道なし　この道を歩む」実篤

<こども>

今まで、自分の励みとしてきた名言だったとも新たな気持ちで読み返し、しばし見入ってしまいました。

さて、今日に至る我が道を振り返ってみると音楽、図工（美術）が好きでした。小学校時代の最初の絵は、校庭の桜を大きなピンクの丸に茶色の木。得意でいた私を父は、桜の花の近くに連れて行き、小枝に咲く美しい桜を説明しながら描いて見せてくれました。その後、憧れの水戸二高に入学し、旧県庁前の桜を見上げながら父の教えを思い出し通学したのが懐しいです。また、この青春時代に伝統あるコーラス部に所属し、藤澤弥生子先生の指導のもと関東支部音楽コンクール大会に向け放課後仲間と練習に励んだことを思い出します。二年になって、進学準備に入り、美術科志望と決め、実技試験の「石膏デッサン」を大沢正夫先生にお願いし、木炭と食パンを手に「ミロのヴィーナス」や「メディチ像」の石膏デッサンの基礎から指導を受けて、茨城大学教育学部美術科に入学することができました。教育学部である一・二年は、一般教養と専門教育・美術全般に渡る講義でしたが、三・四年と専門分野に入り、立体彫刻では、後藤末吉先生の彫塑Ⅰ実技「父の頭像」をⅡで「友」friendを制作し県展（県芸術祭美術展）第一回展に初出品・初入賞を受けたことは、昨年「五十周年記念展」には、特に

<響き>

思いのまゝに

中澤　敦子（昭35卒）

私が二高を卒業して五十八年、四年前に水戸に帰郷しシャンソンカフェ「ルーブル」を営みながら現在も女優の仕事を続けています。又、茨城ことば指導も多数致しましたが、今年のNHK朝ドラ「ひよっこ」一五六話分の仕事は百名以上のスタッフ・キャストの皆さんと「何とか茨城の『空気感』を茶の間に届けたいと一丸となって頑張りました。私にとっては、この一年大変インパクトのある経験でしたが、お陰様でドラマは好評で全国から茨城弁って「素朴で温かくて良いね」という評価を受けてホッとしました。

ところで、これまでの私の人生は流れるままに不器用に生きてきましたが、大勢の人達との出会いで育てられたと思います。それは昭和十六年太平洋戦争開戦の年、上水戸の酒屋の娘として生まれた時からです。十歳上の姉は後に二高の音楽教師となった中澤敏子です。私達兄弟四人は、この時代としては自由な感性を持つ両親の元で、又附属小中校でも自由教育、そして町内では「向こう三軒両隣」のおじさんおばさんに育てられました。この時期が私の人間形成の原点かもしれません。そして二高では演劇部で青春を謳歌し、六十年安保の年に日大芸術学部に入学し、演劇一筋の道が始まったのです。卒業時は東京オリンピック、世の中が大きく変動して行く年に劇団文化座に入団、後に結婚した同級生の夫も他劇団に入り二人で演劇に燃えました。貧乏でしたが、都営住宅に住み昼間は稽古、夜は新橋で新劇の女優達がバイトする歌声酒場で三十年唄い続けました。子育ては、「向こう三件両隣り」の働く母親達で育てたのです。切なかったのは毎朝息子に「お母さん今日僕はどこの家」と聞かれる事でした。

その後私は銀座ルーブルで二代目マダムを二十年、現在も水戸で六十年の歴史を引き継いでいます。お客様はめったにお会いできないような政財界、芸術家の方々、元総理、ジョンレノンさん、ルーブル美術館の館長さんとか…私は異業種の方々との出会いで多くを学び育てられました。

『ひよっこ』の出演者の皆さんと

そして「ひよっこ」との出会いです。方言指導は役者の仕事です。まず自分が台本を読み込み、作家の意図を解釈し、方言に直し完本が出来ます。そしてセリフを録音し、役者に渡します。それから、本読み、リハ、本番と立ち合います。

今回の茨城弁は全国の人が分かるようにイントネーションと濁音をつけて水戸弁にしました。主人公みね子は可愛いらしく、母親は上品に、お爺さんは素朴で朴訥に、おばさん達はバキバキの茨城弁で、キャラによって方言を変えたのです。方言は風土に根ざした存在感をキャラクターとドラマに与えるものだからおろそかにはできません。

思えば私の人生は多くの方々との出会いと色々な時代を経験出来た事が表現者としての財産になったと思います。自分が大切だと信じるものをこれからも大切に大切に育て続けたいと思います。〝ガンバッペー〟

昨年の一月七日～十三日に県民文化センターで「彫刻五十周年記念展」を開催し、無事終える事ができました。この展覧会は歩んできた彫刻五十年の集大成として計画実施したものです。秀芳会の狩野会長様はじめ多くの会員の皆様にご来場いただき厚くお礼申し上げます。

先般、この原稿依頼があり久しぶりに机に向かい思案中に目に入った言葉が、「道・この道より我を生かす道なし　この道を歩む」実篤

さて、今日に至る我が道を振り返ってみると音楽、図工（美術）が好きでした。小学校時代の最初の絵は、校庭の桜を大きなピンクの丸に茶色の木。得意でいた私を父は、桜の花の近くに連れて行き、小枝に咲く美しい桜を説明しながら描いて見せてくれました。その後、憧れの水戸二高に入学し、旧県庁前の桜を見上げながら父の教えを思い出し通学したのが懐しいです。また、この青春時代に伝統あるコーラス部に所属し、藤澤弥生子先生の指導のもと関東支部音楽コンクール大会に向け放課後仲間と練習に励んだことを思い出します。二年になって、進学準備に入り、美術科志望と決め、実技試験の「石膏デッサン」を大沢正夫先生にお願いし、木炭と食パンを手に「ミロのヴィーナス」や「メディチ像」の石膏デッサンの基礎から指導を受けて、茨城大学教育学部美術科に入学することができました。教育学部である一・二年は、一般教養と専門教育・美術全般に渡る講義でしたが、三・四年と専門分野に入り、立体彫刻では、後藤末吉先生の彫塑Ⅰ実技「父の頭像」をⅡで「友」friendを制作し県展（県芸術祭美術展）第一回展に初出品・初入賞を受けたことは、昨年「五十周年記念展」には、特に

<こども>

今まで、自分の励みとしてきた名言だったとも新たな気持ちで読み返し、しばし見入ってしまいました。

さて、今日に至る我が道を振り返ってみると音楽、図工（美術）が好きでした。小学校時代の最初の絵は、校庭の桜を大きなピンクの丸に茶色の木。得意でいた私を父は、桜の花の近くに連れて行き、小枝に咲く美しい桜を説明しながら描いて見せてくれました。その後、憧れの水戸二高に入学し、旧県庁前の桜を見上げながら父の教えを思い出し通学したのが懐しいです。また、この青春時代に伝統あるコーラス部に所属し、藤澤弥生子先生の指導のもと関東支部音楽コンクール大会に向け放課後仲間と練習に励んだことを思い出します。二年になって、進学準備に入り、美術科志望と決め、実技試験の「石膏デッサン」を大沢正夫先生にお願いし、木炭と食パンを手に「ミロのヴィーナス」や「メディチ像」の石膏デッサンの基礎から指導を受けて、茨城大学教育学部美術科に入学することができました。教育学部である一・二年は、一般教養と専門教育・美術全般に渡る講義でしたが、三・四年と専門分野に入り、立体彫刻では、後藤末吉先生の彫塑Ⅰ実技「父の頭像」をⅡで「友」friendを制作し県展（県芸術祭美術展）第一回展に初出品・初入賞を受けたことは、昨年「五十周年記念展」には、特に

<響き>

卒業後は、教職に着き、最初の夏季講習で（故）山崎猛先生によるテラコッタの窯築きや焼成方法等児童・生徒の指導に大いに役立ちました。また中央展（一陽会）への出展の勧めもあり、（第十一回展から六十三回展）上野都美術館から現在は、六本木の国立新美術館に移動した五十年間、地元の県芸術祭美術展覧会と共に出展を続けて参りました。

作品制作には、特に計画性と根気強さが大切であり、永年に渡る教育現場でも、児童・生徒が真剣に作品づくりに取り組み「完成のよろこびを味わう」ということは、美術教育の原点であると信じ、個に応じた指導等にも力が入ったものでした。

思えば限られた時間内での制作は、精一杯で反省することばかりですが、よき園師・よき友達との多くの出会いと今は亡き両親の助けや家族の暖かい理解と協力が大きくあって、今日があることに感謝するしだいです。